

## 子どもの発達と読書

子どもの読書能力は、発達段階に応じて成長していきます。ここでは0～12歳前後の発達を概観します。なお、発達の過程には個人差があり、これはおおまかな目安です。

ヴィアックス図書館事業本部 テクニカルサポート室 神保作成

<p><b>0歳児</b></p>	<p>聴覚は妊娠末期(妊娠7ヶ月頃)に完成します。胎内で母親の声を聞いていた赤ちゃんは、生後直ぐに<b>母親の声を聞き分ける能力</b>を持っています。お母さんの声は赤ちゃんにとっては一番心地よい音なのです。たくさん言葉をかけてあげることが、赤ちゃんの情緒発達に大切です。絵本はまだ早いと思われる時期ですが、お母さんの声が聞こえると安心するので読んであげてよいでしょう。</p> <p>寝返りやおすわりできるようになる4ヶ月～6ヶ月過ぎから周囲の状況を認知し、脳の爆発的に発達していきます。形や色のはっきりしたとした絵本の絵を見せながら、そのものを指さしながら繰り返し言葉をかけてあげること、言葉を獲得していきます。最初は意味がわからなくても<b>母親の声は快感</b>であり、繰り返し聴くことで目の前のものと、言葉を結び付けていく作業を始めます。すぐに反応はあらわれなくてもあきらめずに継続していくことが大切です。まだこの頃の赤ちゃんにとって絵本はオモチャです。投げたり、なめたり、ひっぱったり、そうした行為に耐えられる絵本を選ぶことも大切です。絵本を読むという行為よりは、いつも身近に絵本を置いておいてあげるなど、<b>絵本に親しみを感じる</b>ことのできる環境をつくってあげたいものです。</p> <p>また、この時期のお母さんたちは、子育てに関する情報や、絵本に関する情報などを求めています。図書館の絵本コーナーに、子ども向けの本や情報だけでなく、保護者向けのさまざまな情報を受け取れるようなコーナー作りなども工夫しておきましょう。</p> <p>おはなし会などでは、同年代の親同士のコミュニティを作れるような仕組みも図書館が主導して作りましょう。「図書館が、子育てを支援してくれている」、「情報を提供してくれる」、「図書館は心強い味方だ」と思ってもらえると、親子で継続して図書館を利用するようになります。生涯を通して図書館と関わりをもっていく、その一番初めの乳児期のサービスがどれほど重要か、あらためて考えてみましょう。</p>
<p><b>1歳児</b></p>	<p>喃語とよばれる「あーあー」といった発語から意味のある単語を話すようになるのが1歳前後です。個人差はありますが、1歳台は言語獲得の能力の発達は著しく、2歳になる頃には単語から二語文と変化し、語彙が増えておしゃべりができるようになってきます。探求活動も増え「これは何だろう?」と<b>興味関心を抱く</b>ようになります。<b>タイミングよくお母さんが語りかける</b>ことが、言語獲得には大切です。絵本はまだ長いストーリーには興味を示さず、つぎつぎページをめくってしまうでしょう。絵本の中にみつけた興味のあるものを指差して喜んだりします。無理にストーリーを追わなくてもいっしょに絵を指し示しながらおしゃべりを楽しみましょう。この時期には<b>絵のはっきりした絵本や、ことばにリズムや繰り返しのあるような絵本(オノマトペ)、しかけのある絵本</b>などが喜ばれます。</p>

	<p>利用者のニーズが高まり「赤ちゃんおはなし会」を開催する図書館が増えましたが、集団での読み聞かせは、集中力も続かず、まだハードルが高い時期です。保護者のお膝の上で遊ぶ「わらべうた」は、1対1の世界を保持でき、不安を少なくすることが可能です。またその経験の積み重ねがおはなしを聞く力につながっていきます。<b>図書館でも「わらべうた遊び」を取り入れていくことをお勧めします。</b>わらべうた遊びを楽しみながら、短い絵本を状況に応じて1、2冊程度紹介するようなプログラムにすると良いでしょう。</p>
<p><b>2歳児</b></p>	<p>認知能力もますます発達して短いストーリーの絵本をじっと楽しめるようになってきます。子ども達の生活の中でのエピソードなどが絵本にあると、喜びます。お気に入りの絵本が出来て「何度も読んで！」と、せがまれたりするでしょう。絵本がオモチャではなくなっていく時期です。個人差も大きいのですが、いろんな絵本をたくさん読んであげることが大切です。</p> <p>図書館では「同じ本ばかり借りたがるのです」という相談を受けることがあると思います。同じ本を何度も何度も読んでもらうというのは、子どもたちにとってはとても大切なことなのです。その本が大好きで、読んでもらうと安心できる、あるいは主人公の気持ちにそって追体験ができるなど、読んでほしい理由はたくさんあるでしょう。それにしっかり応えてあげることが大事だということを伝えましょう。</p>
<p><b>3歳児</b></p>	<p>2歳台の第一次反抗期を過ぎると自我が形成され、それと同時に物語の世界に分け入っていけるようになります。主人公の気持ちに素直に感情移入できるようになります。この時期は<b>創造力・想像力の発達も著しい時</b>です。たくさんの素晴らしい作品に出会わせてあげたいものです。</p> <p>その一方で、集団の中でのルールというものにも関心をいただき、素直に相手の気持ちを理解しようとする時期です。図書館の中での決まり、おはなし会でのマナーなど、丁寧に説明してあげることも大切です。自分が一人前に扱われているという経験は、子どもの<b>自尊心</b>を育てていきます。対応する図書館側も、意識をして向き合しましょう。</p>
<p><b>4歳児</b></p>	<p>関心の幅が広がってきます。自分の好きなもの、興味・関心の深いものに傾倒していく時期でもあります。科学絵本・図鑑・物語・ナンセンスものなど読書の幅も広げてあげましょう。子ども自身が選ぶと偏りやすいので、おとなが「これも読んであげようね」と、違う分野のものを選んでみるのもよいでしょう。感性が豊かに育つこの時期に、<b>たくさんのスイッチ</b>を作ってあげたいものです。図書館で、おすすめの絵本のリストを作成しておきましょう。</p> <p>3・4歳になるとテレビの影響がだんだん色濃くなってきます。選ぶ本も、<b>テレビで人気のキャラクターものに傾くこともあります。</b>それを拒否する必要はありません。そこから、次のステップへ必ず移行することを信じて待ちましょう。その一方で、テレビの刺激ばかりではなく、時には静まる時も大切です。動と静のバランスを考えて絵本を読んであげましょう。</p>
<p><b>5歳児</b></p>	<p>字に興味を持ち始め、自分でも読めるようになって来る時期です。この時期、保護者からは「自分で字が読めるのに、読もうとしないのです」という相談を受けることがあるでしょう。字を読むための識字能力と、本を読んで物語を理解できる力はまったく別物です。<b>小学校低学年までは、読んであげることが大事です。</b>耳から聴く読書を積み重ねることで、<b>語彙が</b></p>

	<p>増え、想像力が養われていきます。この時期に、読んでもらえなくなった子どもは、自分で読む時に、行間を読むということができないまま、字を追うので、読書がつまらなく感じ、読書習慣を手放すことになりかねません。図書館で相談を受けたら、そのことをきちんと伝えられるようにしましょう。</p> <p>親の知らない子ども自身の世界が広がっていく時期だけに、一日 10 分でも親子が同じ感動を共有できる時間を大切にしてほしいものです。</p>
<p>小学校 低学年</p>	<p>興味を持つ分野も、読書力も個人差が大きくなってきます。これは幼児期の経験の量によって差がでると言われています。自分で読む力を身につけるために、読み聞かせも並行して続けて欲しいと思います。1年生の夏休みに長編作品を毎晩母親に少しずつ読んでもらった子が、翌年には次巻を自分で読みきることができた、という例もあります。耳からの読書で物語の世界観を作ることができ、自分で読もうとする動機付けになったのです。絵本から読み物に移行する時期です。はじめは文章量の少ない幼年童話から入っていくと、物語の本に移行しやすくなります。</p> <p>一方、絵本のなかにも文章が多く、高度で文学的な作品も多くあります。絵本を手にしていくからといって、馬鹿にせずに大切に読んでいくことを習慣付けたいです。小学生向けの絵本のリストも「本のこまど」の中で紹介しています。ぜひ参考にしてください。</p>
<p>小学校 中学年</p>	<p>読書量と語彙力に相関関係がみられます。学習として勉強する熟語や慣用句よりも、自分で読んだ物語の中で、生きた言葉として使われているところから身につけたほうが、自分のものになります。国語の読解力というのは、一朝一夕には身につかないものなので、読書の習慣を継続的に養ってあげたい時期です。そのためには家庭での環境が大切です。身近にいつも本がある状態をつくるために家族で図書館に行く、親も食後は読書する姿を見せる、ということがとても大事です。そのことを図書館でも最大限アピールし、親子で読める本の特集を組むなど、書架や展示に工夫するとよいでしょう。</p> <p>「耳から聴く」という体験が、想像性の発達に寄与し、メタ認知能力(物事を客観的・俯瞰的に把握する力)の育成にも効果があることがわかっています。図書館でも、そこを意識して、小学生には「素話」など、「耳から聴く」読書の大切さを伝えていきましょう。</p> <p>一方で、物語以外の本にも積極的に出会わせてあげて欲しいと思います。「調べ学習」を通してさまざまな「知りたい」に応えられる蔵書群を作っておくことも大切です。入門的な写真絵本などから、詳しく調べられる本まで、知識の本についても目配りが大切です。</p>
<p>小学校 高学年</p>	<p>本を読む子と読まない子、読めない子の差がどんどん広がってきます。ファンタジーの世界に浸ることができる楽しみをぜひ味わわせてあげたいものです。</p> <p>また自分自身が興味をもったものをインターネットだけではなく、書籍から調べる醍醐味も身につけてほしいです。インターネットの時代でも、本の持っている豊かな世界は廃れることはないでしょう。幼児期の絵本との出逢いから、本に親しみ、想像力を育んできたことが、子ども自身がその後いろいろな情報のアンテナを張り巡らせるのに助けになっていることが多いのです。</p> <p>この時期の年齢は親や先生に命令されて、あるいは義務感で読む読書には興味が持てな</p>

	<p>いものです。親をはじめ周囲のおとなができることは、常に手に取りたくなる様な本を身近においてあげる環境作りです。さまざまなジャンルの本に幼少期からたくさん出会わせてあげておくことも大切です。ほんものを見る目は、幼い時代から徐々に育っていきます。気長にいっしょに楽しみながら、親も子どもも育って行ける・・・それが絵本や児童書のもっている魅力です。図書館では、子どもたちが手に取りたくなるような選書そして展示に心がけ、児童向けレファレンス・サービスを強化して、子どもや親が出会いたい本と出会えるような機会を増やしてほしいと思います。</p>
<p>中学～ 高校生</p>	<p>中学～高校生世代は図書館の中ではヤングアダルト(YA)と表現され、それまでの児童サービスとは違うアプローチが必要です。</p> <p><b>第二次性徴による身体的変化が著しい時期</b>でいわゆる思春期にあたります。性ホルモンが大量を作られることにより、女の子は初潮を迎えるなど身体的に大きな変化が起きます。このホルモンバランスの急激な変化は身体だけではなく、心理的な面でも大きな影響を与えます。心は子どものままでいたいのに、身体が大人へと変化していくことへの戸惑いや不安にあわせて、自分では説明ができないような不定愁訴(だるい、気力が起きない)も引き起こされます。周囲の理解がないと、攻撃的な反応や逆に引きこもるなど不適応も起きます。</p> <p><b>精神的には、自分や社会を客観的に見ることができるようになり、自我が形成されていきます。</b>「自分とは何か」、「人は何のために生きているのか」を問うようになり、大人、特に完璧だと思っていた親や教師がそうではないことを知って、反抗的になるのもこの時期です。親から自立したいと願いながらも、実際には経済面などで依存しなければならないという矛盾も抱えています。社会的にも一方で大人の振る舞いが求められ、一方では子ども扱いされるなど二律背反の価値観の中で苦しむこともあります。また、自己を客観視する中で他人の目を必要以上に意識することもこの時期の特徴です。</p> <p><b>部活動や受験勉強などで図書館から足が遠のいてしまいがちですが、将来について考えるために、またさまざまな不安を取り除くためにも出会ってほしい本がたくさんあります。</b>この世代が自由に集える「場」を図書館に作ること、親でも先生でもない立場での図書館スタッフと出会い、人生を支えてくれる本に出会うことは、とても大切なことです。身体も大きく数人で固まって行動すると館内で目立ち、注意する対象と考えがちですが、YA世代のニーズはなにかを分析し、彼らの居場所、心の拠り所となるようなサービスを考えていくことが重要でしょう。</p>

この資料は、作成者神保が専門の幼児教育学の知識と、自身の4人の子育て経験および28年間の子どもに本を手渡す活動経験からまとめたものです。